

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 12 日現在

機関番号：13101

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520536

研究課題名(和文) 英語・日本語数量詞句の統語構造、意味・談話的性質、作用域特性に関する理論的研究

研究課題名(英文) A Theoretical Study on Syntactic Structure, Semantic/Discourse Properties and Scope Properties of Quantified Phrases in English and Japanese

研究代表者

本間 伸輔 (Homma, Shinsuke)

新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授

研究者番号：40242391

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、英語と日本語においてどのような統語構造上の要因が数量詞の作用域を決定しているかについて考察を行うものである。第一に、数量詞句の作用域と統語構造との関連性を考察し、数量詞句内の構造上最上段の位置を数量詞が占めることによって広い作用域が可能になることを論じた。第二に、数量詞句の作用域と文構造上の要因について考察を行い、文構造において、意味解釈に関わる統語素性によって数量詞句が認可されることによって、数量詞句の広い作用域が可能になると論じた。第三に、英語と日本語との間に見られる作用域パタンの相違は、主語の認可のされ方の違いに基づくことを示した。

研究成果の概要(英文)：This study is an investigation into what syntactic factors serve as determinants of quantifier scope in English and Japanese. I have investigated into the relation between the scope of quantified noun phrases (henceforth, QPs) and their syntactic structure and shown that it is the presence of a quantifier in the highest hierarchical layer in a QP that makes the wide scope reading possible for the QP. Secondly I have investigated the relation between the scope of QPs and syntactic factors in the sentence structure and shown that the scope of a QP is determined by whether the QP is licensed by a syntactic feature having to do with semantic interpretation. Thirdly I have argued that the difference between Japanese and English with respect to the scope of QPs is ascribed to the way in which the subject QP is licensed.

研究分野：言語学, 英語学

キーワード：生成文法 統語論 数量詞 作用域

1. 研究開始当初の背景

(1) 数量詞句の作用域を決定する仕組みについては、生成統語論において盛んに研究されてきた。数量詞句そのものに起因する要因に着目した研究としては、Diesing (1992), Homma et al. (1992)による、数量詞句の前提性(数量詞句が、談話上存在が前提されている母集合の成員を指すこと)が作用域の取り方を決定するという分析がある。これに対して、数量詞句の作用域は、数量詞句の構造的要因によって決定されるという立場の分析もある(Hasegawa (1993))が、どちらの立場がより包括的な説明ができるかに関しては課題が残っていた。

(2) 機能文法論における、とりわけ Kuno and Takami (2002)等の一連の研究によって、作用域決定に関わる意味・談話的要因が数多く指摘された。一方生成統語論においては、近年のカートグラフィーの研究によって、文の統語構造と意味・談話的要因との対応関係が明らかにされてきた。このような背景を踏まえると、数量詞の作用域決定に関わる意味的・談話的要因が統語構造的な仕組みとして捉え直される可能性が残されることになる。

(3) 本研究代表者は、本研究課題につながる研究として、数量詞の前提性と作用域特性の関係についての研究を行ってきた。Homma et al. (1992)では、数量詞句の作用域特性を、作用域決定を司る統語操作の適用可能性が数量詞句の(非)前提性に起因するという観点から説明した。これに対して、本研究の準備的研究である Homma (2011)では、Diesing (1992), Homma et al. (1992)の代案として、前提性に関わる統語的素性の認可によって作用域特性を説明する可能性を示唆した。

参考文献

- Diesing, M. (1992) *Indefinites*. MIT Press.
Hasegawa, N. (1993) "Floating Quantifiers and Bare NP Expressions," in N. Hasegawa ed. *Japanese Syntax in Comparative Grammar*, 115-145, Kurosio Publishers, Tokyo.
Homma, S. (2011) "Scope and Syntactic Licensing of QPs," 『新潟大学言語文化研究』第16号.
Homma, S., N. Kaga, K. Miyagawa, K. Takeda, and K. Takezawa (1992) "Semantic Properties of the Floated Quantifier Construction in Japanese" *Proceedings of the 5th Summer Conference of TLF*, 15-28. 東京言語学研究会
Kuno, S. and K. Takami (2002) *Quantifier Scopepe*, Kurosio Publishers.

2. 研究の目的

以下の3つの目標の達成を目指す。

(1) 数量詞の作用域決定が数量詞句の内部構造のどの部分に起因しているのかを明らか

にする。

(2) どのような意味・談話的要因が広い作用域をとることを可能にしているかという点について再検討を行う。

(3) 数量詞句の意味・談話特性に関わる素性が文の統語構造上どのように認可され、さらに数量詞句の作用域決定にどのように関与するかを検討する。

3. 研究の方法

(1) 平成24年度は2の(1), (2)の課題について、平成25年度は2の(2), (3)の課題について研究を進めた。数量詞句の統語構造および意味・談話的特性、作用域特性に関する先行研究のサーベイを行った。このために、各課題についての最新の文献および最近の学会のプロシーディングを購入し、検討した。また、学会や研究会で最新の研究情報を入手し、検討した。これと並行して、数量詞句の統語構造、意味・談話的要因と作用域特性の関連性についてのデータの整理を行い、各データを説明する分析方法を検討した。さらに、本研究代表者自身のこれまでの研究の再検討を行った。ここまでの成果を論文にまとめ、学会での口頭発表への応募、紀要への投稿を行った。

(2) 平成26年度は2の(1-3)の課題について総括的研究を行った。(1-3)の課題に関する、最新の研究動向もフォローできるように文献のサーベイを継続した。また、学会や研究会で最新の研究情報を入手し、検討した。各課題に関する総括的検討を行い、論文を執筆した。この論文は紀要に発表した。また、これまでの研究成果を研究報告書にまとめた。

4. 研究成果

(1) 数量詞句の作用域決定には、数量詞句の意味的特性(前提性)ではなく、統語構造が決定的要因として働くことを示した。その統語構造上条件とは、数量詞が数量詞句内で、(i)のように数量詞句の最上層にある指定部の位置を占める場合(以下、タイプ1数量詞句)に、広い作用域が可能になるが、そうでない数量詞句(タイプ2数量詞句)は狭い作用域しかとれないというものである。このことは、修飾表現が数量詞に先行する場合に広い作用域が取れないこと(ii)や、(iii)で見られるように、前提的解釈をされる数量詞句(「先生が推薦した本を2冊」)であっても、(i)の構造上の条件を満たさないために(iv)の非前提的解釈の数量詞句(「本を2冊」)と同様に作用域が狭くなるという事実によって裏付けられる。

(i) [DP many [NP students]]

(ii) 赤い2台の車を全ての人が目撃した。
(*2 > 全て, 全て > 2)

(iii) 先生が推薦した本を2冊すべての学生

が読んだ

(「2 > すべて」の解釈のみ)

- (iv) 本を2冊すべての学生が読んだ
(「2 > すべて」の解釈のみ)

(2) 数量詞句の統語構造と前提性との対応関係が従来の研究で指摘されてきたが、この対応関係は限定的な形で認められるものの、一対一の対応にはなっていないことが分かった。具体的には、タイプ1数量詞句は、前提的な解釈になるが、前提的な解釈は(i)の条件を満たさない場合でも、(iii)の「先生が推薦した本を2冊」などのように、例えば関係節を含む場合などで可能である。

(3) 日本語のかき混ぜ(スクランプリング)には、A移動とA'移動の2種類あることが従来から指摘されているが、タイプ1数量詞句には両方の種類のかき混ぜが、タイプ2数量詞句には、A'移動かき混ぜのみが適用されることを論じた。A移動かき混ぜが(v)のように、主語の「全員が」が否定より狭い作用域をとることによって診断される(Miyagawa (2010))とすると、(vi)の事実により、タイプ2数量詞句はA'移動しかできないことが分かる。さらに、この制約を Miyagawa (2010)の提案するtopic素性がA移動かき混ぜを牽引するという仮定によって説明した。

- (v) 3人の学生を全員が指導しなかった
(全員 > ない、ない > 全員)
(vi) 学生を3人全員が指導しなかった
(全員 > ない、*ない > 全員)

(4) (3)での分析によって、(1)で取り上げた作用域の制約が説明されることになる。すなわち、タイプ1数量詞句が広い作用域をとることが可能なのは、topic素性による移動が可能であり、topic素性によって移動した場合に、topic素性が作用域を定める役割をしていることを提案した。

(5) 文中の2つの数量詞句が主語—目的語という語順の場合、日本語では主語の作用域が義務的に広がるが、英語ではどちらが広い作用域をとってもよいことが従来から観察されてきた(Kuroda (1971), Hoji (1985)) ((vii), (viii))。このことは、主語の主語位置での認可を行う素性の違い、すなわち日本語ではtopic素性が、英語ではΦ素性が主語を牽引するという違いに起因することを提案した。

- (vii) 誰かが誰もを責めた。
(some > every, *every > some)

(viii) Someone loves everyone.

(some > every, every > some)

この分析によると、英語の逆作用域(主語—目的語の語順の場合に、目的語の作用域が広がること)は、目的語のtopic/focus素性が、主語を超えて移動することによって可能になるのに対し、日本語では同移動が主語を超えることが、主語のtopic素性によって阻止

されるために、逆作用域が不可能になる。

(6) (5)の帰結として、日本語でも主語がtopic素性によって認可されない場合は、英語のような逆作用域が可能になることを指摘した。例えば、知覚動詞補文などの従属節ではかき混ぜがA移動の特徴を示さない(Ueyama (1998), 上山(2006))ことから、topic素性が関与していないことが示唆されるが、このような節においては、逆作用域が可能である。

- (ix) 2人の警官が全てのVIPを護衛しているのが見えた。

(2 > 全て、全て > 2)

- (x) 2人の教員が全ての学生を指導するのは不可能だ。

(2 > 全て、全て > 2)

(7) (1-6)において、数量詞句に2種類あることを提案してきたが、これに加えてあと2種類の数量詞句があることを示した。1種類は日本語の「全員/全部」+格助詞が該当する。このタイプの数量詞句は、topic素性による可視的移動は起こすものの、不可視的移動が起こらないと分析した。もう1種類は、格助詞が見つからない「全員」である。この数量詞句は、かき混ぜ移動においてA移動しか起こさないことを論じた。

参考文献

- Hoji, H. (1985) *Logical Form Constraints and Configurational Structures in Japanese*, Ph.D. diss., University of Washington.
Kuroda, S.-Y. (1969/70) "Remarks on the Notion of Subject with Reference to Words Like *Also, Even, or Only*," *Annual Bulletins* 3, 111-129, *Annual Bulletins* 4, 127-152, Tokyo University.
Miyagawa, S. (2010) *Why Agree? Why Move?: Unifying Agreement-Based and Discourse-Configurational Languages*, MIT Press, Cambridge, MA.
Ueyama, A. (1998) *Two Types of Dependency*, Ph.D. diss., University of Southern California.
上山あゆみ (2006) 「節の構造と判断論」, 長谷川(編)『日本語の主文現象』, 113-144, ひつじ書房

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

Homma, Shinsuke (2015) "A Note on Quantifier Scope in English and Scrambling," *Universality and Individuality in Language* 6, 19-45, Niigata University.
(査読無し)

Homma, Shinsuke (2014) "Two Types of QP and Scrambling," *Universality and*

Individuality in Language 5, 33-49, Niigata University. (査読無し)

Homma, Shinsuke (2014) “On the Scope of Bare Plural Noun Phrases in English,” *Bulletin of the Faculty of Education* 6-2, 115-125, Niigata University. (査読無し)

Homma, Shinsuke (2013) “On the Scope Property of *Zen'in*, *Zenbu* and *All*,” *Universality and Individuality in Language* 4, 27-52, Niigata University. (査読無し)

本間伸輔 (2013)「数量詞の前提性と統語構造に関する一考察」, 『新潟大学教育学部研究紀要』第5巻第2号, 133-140頁. (査読無し)

〔学会発表〕(計1件)

本間伸輔 (2012)「数量詞句の構造と作用域について」, 新潟大学言語学研究会, 平成24年12月21日, 新潟大学

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況 (計0件)

名称 :

発明者 :

権利者 :

種類 :

番号 :

出願年月日 :

国内外の別 :

取得状況 (計0件)

名称 :

発明者 :

権利者 :

種類 :

番号 :

出願年月日 :

取得年月日 :

国内外の別 :

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

本間 伸輔 (HOMMA, Shinsuke)

新潟大学人文社会・教育科学系・准教授

研究者番号 : 4 0 2 4 2 3 9 1

(2) 研究分担者

()

研究者番号 :

(3) 連携研究者

()

研究者番号 :